
Nightmare City

助沼龍斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N i g h t m a r e C i t y

【Nコード】

N 0 7 9 7 U

【作者名】

助沼龍斗

【あらすじ】

オンラインゲームが現実化してしまった世界に同様に隠せない主人公関谷 伯とその友達、久野 雅人。突如出現した巨大な機械人に二人はどう立ち向かうのか。この後の進展はいかに！？

Nightmare City 第一話 (前書き)

よろしくね

Nightmare City 第一話

Nightmare City

作 助沼龍斗

第一話 プログラム始動

あるパソコンオンラインRPGゲームが流行っていた。

ゲーム名は「ナイトメアシティ」という暗黒化した都会の街が舞台のゲームだ。ス

トーリーとクオリティが評価され今やパソコンをもっている若い世代の人間のほと

んどがゲームをプレイしている状態だ。ある都会の高校に関谷 伯

という天才ハッカー

がいた。伯はパソコンにはすごく関心があるが、オンラインゲームにはまったくの

無関心であった。ある日、伯の友達の久野 雅人が「ナイトメアシ

ティ」をやるのか？と進めてきた。

雅人「おい伯。めっちゃ面白いオンラインゲームがあるんだけどさ、

いっしょに

やらないか？」

伯「どんなんだ？」

雅人「めっちゃストーリーが面白いんだ。クオリティも抜群、おま

けに無料と来

た」

伯「そうか。だが生憎オンラインゲームには興味がないんだ。悪いな」

雅人「ちえっ、つまんねー」

だが伯は何かが気になった。あまり興味がない俺でも名は聞いた事あるあのナイト

メアシティというゲーム。あれだけ人気があってクオリティ抜群のゲームが無料だ

なんて虫が良すぎるんじゃないか。高校から自宅に帰った伯は早速自分のパソコン

でハッキング技術を使いナイトメアシティについて調べた。

伯「どーれどれ？」

調べた結果、不気味なことが判明した。ゲームの作者及びゲーム会社などの情報が

すべて不明なのであった。

伯「やっぱりな。なんか怪しいと思ってたぜ。このパターンはオンラインゲームを

通じて個人情報盗む戦略だな」

伯はこのゲームをやっている人間から発せられる情報の中に個人情報流出の被害が

ないか調べてみた。が、そのような情報は何一つ見当たらなかった。

伯「ますます怪しくなってきたな」

伯はそのオンラインゲームをプレイしてみることにした。プレイしてみた時点では

なにも怪しいことは無かった。

伯「はあー。何やってんだ俺。考えすぎか？」

伯はゲームを止めパソコンの電源を切り寝床についた。

翌日、やはり雅人がまたもやナイトメアシティを進めてきた。

雅人「おい伯。やっぱりお前もやろーぜ」

伯「ああ実は昨日やってみたんだがやはり趣味に合わないというか」

雅人「やったのか！たのむ！今日一緒にやろうぜ！」

伯「まあ気が乗らないがいいだろう」

雅人「おっしゃ！」

自宅に帰った伯は雅人と約束した時間にナイトメアシティを起動しようとした。

が、ログイン画面から先に進めない。

伯「ん？なぜだ？」

同時に雅人から電話が掛かってきた。

伯「なんだ？」

雅人「ログイン画面から先に進まねーよー」

伯「お前もか」

雅人「そういえばこのゲーム昨日からおかしいな」

伯「何がだ？」

雅人「なんかさ、昨日プレイしてたらさ、いきなり電源落ちて画面に赤い文字のカ

タカナでスベテラムニカエスって表示されてさ」

伯「やっぱり何かおかしいなこのゲーム」

雅人「まあいいや。今は起動できないからゆっくり電話で話でもしてようぜ」

伯「だな」

それから数分間雅人と電話で話していた。すると、電源を切っていたはずのパソコンの電源がいきなりつき始めた。

伯と雅人「ん？」

雅人「お前の所もか？」

伯「ああ、こんなこと初めてだ」

勝手に電源がついた後、ナイトメアシティが自動で起動された。やばい、何かが起きる。

と覚った伯はとっさにパソコンのプラグを抜いた。が、パソコンは起動したまま。

伯「んなっ!？」

雅人「どうした!？」

伯「プラグを抜いても電源が落ちない！」

雅人「はぁ！？」

そしてそのままゲームのログインの段階まで進む。

雅人「まじかよ……」

伯「くそっ！」

そして自分しか知らないはずのID、そしてパスワードが自動で入力されていく。そ

してログインが終わると同時に画面が真っ暗になり「ナイトメアプログラム開始」

と赤い文字で表示された。その文字を目にした二人は気を失い床に倒れこんだ。

数分後……

雅人の声が聞こえてきた。

雅人「……い！……きろ！……おきろ！」

伯「雅人？」

伯はもうろうとしながら起きた。雅人の声は握り締めていた携帯電話から聞こえる

ものだった。

伯「雅人か。俺は一体……」

雅人「気を失ったんだ。俺もお前も。それより外を見てしろ」

伯は窓から外を見てみた。外は真っ暗になっていて誰一人街を歩いている人はいなかった。

伯「もうこんなに暗いのか」

雅人「いや、ちがう。携帯電話の俺たちの通話時間を見てしろ」

伯は通話時間を見た。そこには通話時間30分と書いてあった。

雅人「おかしいだろ。俺たちが電話し始めたのは午後の3時からだ。それが30分

経ってこんなに暗くなるはずあるのか？」

伯「一体なにが起こってるんだ？」

雅人「それに……人が消えてる」

伯「なに!？」

雅人「さっきお前が気を失ってる間に確かめてきたんだ。リビングに居た家族も、

家のまわりの親戚も。誰一人残らず消えてた」

伯はとっさに自分の家の中を調べた。

伯「俺のところも同じだ……でもどうして俺らは消えてないんだ？」

雅人「さあな。……それよりお前も見ただろ？あの赤い文字」

伯「ああ。ナイトメアプログラム開始ってやつだろ？」

雅人「そうだ。……これはあくまで俺の考えなんだが……これはおそらくナイトメアシティが現実化したんじゃないかな」

伯「まさか、そんなことありえるのか？」

雅人「普通はありえないな。だけど今はそう考えるしかない」

二人はとりあえず近くの公園で合流することにした。

そして二人は合流した。

雅人「ほんときれいさっぱり俺たち以外みんな消えちゃってるな」

伯「そのようだな」

雅人「でき、もし本当にナイトメアシティが現実化してるなら恐ろしいことが何点

かある」

伯「何だ？」

雅人「今こういう風に真っ暗になってるように現実化してるのが街の状況だけなら

まだいい。だが、現実化してるのが街の状況だけじゃないとしたら……」

その時、「ドスーン」という何か巨大なものを勢いよく地に落とし、
たような音が聞こえた。

伯と雅人「んなっ!?!」

二人は音がした方向を恐る恐る見た。そこには赤く目を光らせた巨大な剣を携えた

大きな機械人がこちらを見下しながら聳え立っていた。

伯「・・・・お前が言おうとした恐ろしいことってのはこういうことか?」

雅人「御名答」

機械人は巨大な剣を二人目掛けて勢いよく振り下ろしてきた。二人はとっさに避けた。

伯「あぶねえ!」

雅人「こいつはブロウ。ナイトメアシティの中では雑魚敵なんだがそれはゲームの中の話で今の俺等にどうにかできる相手なのかは解らない」

伯「逃げるぞ!」

雅人「無理だ!」

伯「はあ!?!」

雅人「ナイトメアシティがここまで現実化してるならおそらくゲームのルールも現実化してる可能性が高いんだ!」

伯「だからなんだ!?!」

雅人「ゲームのルールではパーティを組んでいる状態で敵に遭遇した場合、逃げる

を選択したときにパーティの仲間一人を犠牲にしなければならねえ。

つまり逃げた

らどっちか死ぬってことだぜ」

伯「クソゲーじゃねえか!」

機械人は伯目掛けて剣を振り下ろしてきた。伯は辛うじて避けることができた。

伯「くそっ!」

雅人「大丈夫か!？」

伯「なんとかな」

雅人「ルール上こいつを倒すしか道はねえ」

伯「でもどうやって？」

雅人「俺も解らない!」

機械人はまたもや二人目掛けて剣を振り下ろしてきた。伯は避けられ
たが雅人が負傷
した。

雅人「ぐっ!」

伯「雅人!大丈夫か!？」

雅人「大丈夫だ。かすり傷だ」

伯「くそっ!このままじゃ二人とも・・・」
すると伯と雅人の右手が激しく光りだした。

雅人「なんだ!？」

伯「んなっ!？」

光が治まると二人は右手に剣を握り締めていた。

伯「剣?」

雅人「これは!」

それはゲームで自分のキャラクターが使用していた剣と同じものだった。

雅人「これは俺がゲームの中で手に入れたシルバーソードだ!」

伯「そうか!俺たちのキャラクターデータも現実化されたのか!」

伯は機械人に剣先をむけた。

伯「いくぜ!おりゃああ!」

伯は機械人を切りつけた。機械人はひるんだ。が、倒れない。機械人は怒り反撃してきた。

伯「まじかよ!？」

雅人「伯!どけ!」

伯「!？」

雅人「うおおおお！」

雅人は機械人を剣で切りつけた。機械人は一撃で倒れてその後粉碎した。

伯「助かったのか？・・・それにしても何で俺の攻撃がまるで効いてなかったんだ？」

雅人「当たり前だろ。お前のは初期装備だ」

伯「なるほどな」

雅人「とりあえず敵と遭遇しない場所に行こう。そこでこれからのことを考えようぜ」

伯「そうだな」

二人は公園からすぐ近くのビルとビルの中の狭い路地に身を潜め、そこで休んだ。

ラム始動 END

第一話 プログ

Nightmare City 第一話（後書き）

よろしくね

Nightmare City第二話(前書き)

よろしく

Nightmare City 第二話

Nightmare City

第二話 謎のNSS

巨大機械人との戦闘を終えた伯と雅人は敵に見つからない狭い路地でこれからの行動について話し合っていた。

伯「一体どうなってるんだ」

雅人「いろいろ訳わかんなくて困るぜ」

伯「携帯電話は何故か電波入らないし」

雅人「ナイトメアシティが現実化してしまった以上俺らの世界へ戻るのは無理

だと考えたほうが良さそうだな」

伯「そもそもなんで現実化してしまったんだ」

雅人「さあな」

そのとき伯の携帯電話に着信が来た。

伯「ん？おかしいな。電波は入らないはずなのに。しかも非通知だ」

雅人「まで！おかしいだろ。俺等以外みんな消えちゃったってのに誰から電話が

来るんだよ？」

伯「まだみんな消えたって決まった訳ではないだろ」
そう言って伯は電話に出た。

伯「・・・もしもし」

「・・・貴様らは、何者だ？」

伯「こっちのセリフだ。お前から名乗れ」

「??？」私はNSS、ナイトメアシティのサーバーでありシステムそのものだ」

伯「意味が解らないな。では人間ではないということか？」

NSS「その通りだ」

伯「そうか。だったら教えてもらおう。なぜナイトメアシティが現

実化してるんだ？」

NS S 「貴様等に言う必要はない」

伯 「なぜだ？」

NS S 「私は質問したい」

伯 「・・・なんだ？」

NS S 「貴様等はなぜ消えていない？」

伯 「こっちが聞きたいね」

NS S 「・・・そうか。貴様等には消えてもらう」

その後電話は切れた。その直後、公園で出てきた敵と同じ、機械人が空中から複数

降り立ち伯と雅人を取り囲んだ。

雅人 「くそっ！ またかよ！」

伯 「数が多すぎる！」

雅人 「二手に別れて倒すぞ！」

伯 「わかった」

だが、数に圧倒され徐々に体力を奪われていく。

伯 「くそ！ せめてまともな剣があれば！」

その時、倒した機械人が粉碎したところに剣が落ちてるのが目に入った。

伯 「あれは！」

伯 は急いでそこに駆けつけその剣を拾った。

伯 「これがアイテムドロップってやつか？」

伯 はその剣に持ち替え機械人を切りつけた。機械人は一撃で倒れ、粉碎した。

雅人 「お、新しい剣を入手したのか。だが油断するな。まだ機械人はわんさか居る」

伯 「わかってる」

その後、伯と雅人は機械人を全滅させた。

伯 「やっと終わりか」

その束の間またもや空中から一体の敵が降りてきた。真っ黒いドラ

ゴンだ。

伯「おい・・・勝てる気しないぞ」

雅人「こいつはまずい！」

伯「こいつしってるのか？」

雅人「こいつは一定のクエストをクリアした上級者にしか出てこないドラゴンだ。」

俺でもまだ倒したことが無い」

伯「逃げたらダメなんだろう？やるしかないぞ！」

伯は思いつき切りかかりに言った。

雅人「伯！よせ！」

伯は羽で叩き落とされ地面に激しく落下した。

伯「ぐあああああ！」

雅人「伯！！！」

伯「く・・・くそ・・・！」

雅人はどうすることもできず剣を構えたまま震えながら立ちすくんでいた。

雅人「くそ・・・どうすれば・・・行けばやられる・・・行かなければ伯が

・・・」

ドラゴンは倒れている伯のところに降りたち、踏み潰そうとしている。

雅人「くそ・・・くそ・・・どうすれば・・・」

そのとき遙か空中から槍をもった女が急降下してきた。

女「そこまでだああ！」

女は空中からドラゴンの頭部に槍を突き刺した。ドラゴンは一瞬で粉碎された。

女「キミたち、無事？」

雅人「あ・・・ああ。あんたは一体？」

女「話は後よ。その倒れてる子を担いでついてきて」

雅人は伯を担いで女のあとをついていった。数分後、あるビルにた

どりついた。

女「この地下なら安全よ。」

雅人は女についていき地下に入った。そこにはテーブルやイスなどもちゃんと

あり、敵の侵入を防げる快適空間が広がっていた。雅人は近くにあったソファーに

伯を寝かせ、イスに座った。

雅人「さて、落ち着いたところで、話してもらおうか？ あんたは何者だ？」

女「少し待って。この子の回復が先よ。手遅れになるわ」

そういった女は伯の胸の上に手をかざし、なにやら詠唱を唱えはじめた。

女の手が青く光出し、伯の傷がどんどん癒えている。

雅人「回復スキルか」

女「そうよ」

雅人「こんな高度な回復スキルを使えるってことは相当な上級者だな。

恐れ入ったぜ」

伯は目を覚ました。

伯「ん・・・俺はいつたい・・・ここはどこだ？」

女「安全なところよ」

伯「あなたは？」

女「そうね。ちょうど良いわ。自己紹介しましょう」

そういった後3人はイスに座った。

女「私は牧野 安奈。安奈でいいわ。私もこのゲームのプレイヤーよ」

伯「あんたも消えなかったんだな」

安奈「ええ」

雅人「ていうことは消えてないやつがまだどっかに居るってことか？」

安奈「可能性は高いわ」

伯「でもなんで俺たちは消えなかったんだ？」

安奈「それは私にもよくわからない。けど私たちに何か共通点があることは確かね」

雅人「共通点・・・ねえ・・・」

伯「ところであんた・・・いや、安奈はNSSって奴から電話は来なかったか？」

安奈「来たわ。おそらくあなたたちと同じことを言われたと思うわ」
伯「安奈もなぜお前等は消えてない？って聞かれたのか？」

安奈「ええ」

雅人「どうやらそのNSSって奴も俺等がどうして消えてないのか理解できてないみたいだな」

伯「あいつ、自分のことこのゲームのサーバーでありシステムそのものって言ってたぞ」

安奈「そう・・・。ということは人間ではないわね」

雅人「そうするとNSSが黒幕かもってか？」

伯「その可能性が高いな。奴がなぜナイトメアシティを現実化させたのか、

そしてやつ目的は何なのか。調べる必要がありそうだな」

雅人「元の世界に戻す方法が見つからない限り、それをやっというたほうが良さそうだな」

安奈「そうね。そのまえに休みましょう。体力が減っていてはいつ殺されるかわからないわ」

伯「そうだな」

3人は地下で体を休めた。数時間後3人はNSSのことについて調べるため地下を出た。

雅人「んで？どうやって調べるんだ？」

伯「俺はハッキングできる。パソコンとインターネットを使える環境さえあれば、

俺の携帯電話にきたNSSの非通知を逆探知できる」

安奈「少なくとも私たちがいた地下のビルにはなさそうね」

雅人「だったらこのゲームのサーバー自体にハッキングしてみたらどうよ？」

伯「それはナイトメアシティが現実化する前にやってみた。が、相
当な対策のせいで

表面的なことはわかってても内側までのめりこむ事は出来なかった。
俺がうまくハッキング

出来なかったのはこれが初めてだ」

雅人「お前が手こずるなんて相当なんだな」

伯「唯一心配なのがこの携帯の電波を入らないところでインターネ
ットが使えるか

どうかだ」

安奈「探してやってみないことにはわからないわね」

3人は探した末ある電機屋にたどり着いた。

雅人「すみませーん……って誰も居るはず無いか」

伯「あったぞ！」

安奈「ネットは……使えるみたいね！」

伯「ああ」

伯はN S Sの場所をハッキングで調べた。

伯「ここからそう遠くは無い……が、どうもおかしい」

雅人「何がだ？」

伯「この場所……なにも無いんだ」

雅人「意味がわかんねえよ」

伯「N S Sの居る場所自体に実体が無いんだ」

雅人「……そういうパターンかよ」

安奈「行ってみないことには何もわからないわ」

その直後、背後から誰かが怒鳴った。

????「てめえら！そこで何してる？」

そこには両手に剣を構えた男がいた。

伯と雅人と安奈「!？」

第二話 謎のNSS
END

Nightmare City第二話（後書き）

よろしく

Nightmare City 第三話 (前書き)

よろしく

Nightmare City 第三話

Nightmare City

第三話 フェルドウとNSS

伯達はNSSの正体を暴くためある電器屋でパソコンを使いハッキングで

NSSからの着信を使い逆探知に成功した。が、NSSの元へ向かうと思った

その時突如と謎の男が道を阻んでいた。

??? 「てめえら!そこでなにしてる?」

伯と雅人と安奈「!?!」

??? 「たあああ!」

謎の男はいきなり持っていた双剣を構え、襲い掛かってきた。

雅人は辛うじて剣で受け止めることが出来たが、あまりの力量に吹っ飛んでしまった。

雅人「ぐわあああ!」

伯「雅人!」

雅人は壁に叩き付けられた。

雅人「がはああ!・・・くそっ・・・なんて力だ・・・」

伯「くそっ!」

謎の男が双剣を自分の顔の前で十字に構え始めた。

伯「何をやろうとしているんだ!?!」

安奈「やばいわ!剣術スキルよ!」

伯「くそ!まて!落ち着け!俺等は敵じゃない!」

??? 「問答無用!くらえ・・・」

十字に構えていた双剣が炎を纏い出した。

??? 「火炎円衝陣!」

謎の男は炎を纏った双剣を一気に地面に突き刺した。その瞬間、男の周りの広範囲

が地面から激しく炎上した。

伯「うあああ！」

安奈は辛うじてかわすことができた。伯は雅人と同じ場所に吹飛ばされた。

伯「ぐっ……！！」

雅人「伯！……くそ！体が動かねえぜ……」

伯「なんだ……あの強さは……」

伯と雅人は体を動かせないほどダメージを受けていた。

安奈「こうなったらやられる前にやるしかないわね」

安奈は槍先を謎の男の方へ向け低い体制になった。

安奈「光槍！」

安奈は瞬間移動して、謎の男に槍を突き刺した。

雅人「は……早え……」

伯「何だ……今のは……」

謎の男はニヤリと微かに笑った。

「……甘いぜ」

突き刺さったと思われていた槍ががっしりと握られ、体は無傷であった。

安奈「そんな……」

謎の男は安奈に切りかかった。

「……ちえあ！」

安奈「くっ！」

安奈は辛うじてかわした。が、剣が右肩にかすり出血した。

「……くそ……いったい何なんだこの世界は。もうどこにもいつも信じられねえ！」

謎の男は剣を自分の頭上に振り上げた。振り上げた剣は光はじめた。……「……とどめだ！」

安奈「させない！」

安奈は槍を男の喉目掛けて突いた。が、やはり握られ受け止められてしまった。

「だから甘えって……ん？」

謎の男の動きが急に止まった。男は自分の手に付着した安奈の血を驚いた表情で見っていた。

「これは……まさか……」

安奈「？」

「てめえ……フェルドウか？」

安奈「フェルドウ？」

「知らねえか……まあいい。これは間違いねえ。てめえはフェルドウだ」

謎の男は回復スキルを使い安奈のかすり傷を治した。

「攻撃して悪かったな。フェルドウについて知らないフェルドウの民はよ

くいるもんだ。まずはフェルドウについて教えてやる」

安奈「なんだかよくわからないけど、私たちを敵じゃないって理解してもらえたようね。」

いいわ。一旦私たちの地下まで戻りましょう」

安奈は動けなくなった伯と雅人を回復スキルで治療した後、謎の男を地下に案内した。

4人はイスに座った。

伯「さて、お前は何者だ？」

「俺は一ノ瀬 越斗。このゲームのプレイヤーだ。さっきは攻撃して悪かった。」

お前等と出くわす前、敵に襲われて気が立ってた」

安奈「それで、あなたが言っていた、フェルドウっていうのは何かしら？」

越斗「その話をする前にやることがある」

越斗は自分のポケットから小型ナイフを取り出した。

伯と雅人と安奈「！」

越斗「安心しな。殺すわけじゃねえ。お前等二人の血を確かめたいだけだ」

雅人「血だと？」

伯「それを調べて何になるんだ？」

安奈「どうやらフェルドゥというものには血が関係するみたいね」

越斗「ああ。そうだ。見せるだけでいいんだ。少し切らせろ！」

雅人「切らせろだあ？・・・まあいいか。ほらよ！」

雅人は嫌々ながらも越斗に自分の右手をさしだした。越斗は雅人の手の指の腹を

ナイフで若干切り、出てきた血を見た。

越斗「やっぱりな。てめえもフェルドゥだ」

次に伯が手を出してきた。そしてまた指の腹を切り、血を確かめた。が、雅人の血

を見た時とは明らかに違う反応をした。

越斗「これは！・・・まさか！本当に居やがったのか！？」

伯「どうした？」

越斗「いや・・・まあいい話そう」

そういった越斗は再びイスに座った。

越斗「大昔のことだ。人類にはフェルドゥっていう普通の人間とは違う民がいた。

まあフェルドゥってのは一応人間っちゃあ人間なんだが普通の人間にはないある能力があった」

雅人「そんな話聞いたことねえな」

伯「どうして血を見ただけでフェルドゥだってわかったんだ？」

越斗「俺個人の能力だ。俺は血を見ただけでフェルドゥか人間か見分けがつく」

伯「そうか」

越斗「んでその普通の人間には無いフェルドゥだけが使える能力ってのは、自らの血

を使ってあらゆる力を生み出すって能力だ」

雅人「あらゆる力？」

越斗「わずか微量の血を自らの腕力、脚力、知力に変換できるって話だ」

雅人「俺たちにも出来るのか？」

越斗「無理だな。確かに俺たちはフェルドウだ。だがとつくの昔に能力は失われてる」

伯「なぜだ？」

越斗「さあな。んでフェルドウには希少種がいた。リアフェルドウだ。だがフェルドウ

の民の中のわずか2000分の1しか存在しなかったという」

雅人「リアフェルドウか・・・普通のフェルドウと何が違うんだ？」

越斗「フェルドウの進化形みたいなやつだ。普通のフェルドウとしての能力は

普通に使える。だが普通のフェルドウにはないある能力を持ったのがリアフェルドウだ」

伯「どんな能力だ？」

越斗「自らの血を変換して、実体は無いが、思考、知能、感情をもった物体を作り出す能力だ」

雅人「物体なのに実体がないのか？」

越斗「俺もその辺はよくわかんねえ。だがそういう能力があったのは確かだ」

安奈「すごい能力ね」

越斗「お前等、NSSのことについてはもう知ってるな？」

伯「ああ」

越斗「これはあくまで俺の仮説だが、NSSはリアフェルドウによって作られたも

のなんじゃねえかって俺は思うぜ」

雅人「おい、まてよ。確かにリアフェルドウにはそういう能力があるかもしれねえが

大昔の話だろ？今では能力失われてんだろ？それがなぜ今になって？」

越斗「実体がねえんだ。作り出されたやつに寿命がねえってのもありえるだろ？」

安奈「確かにそうね」

越斗「これで俺等がなんで消えてねえか説明がつくだろ」

伯「NSS自体がフェルドウの血で作られてるからだろ？だからNSSと同類の俺等は消えなかった」

越斗「まあそんなもんだろうな。そして、伯……といったか？」

伯「そうだ」

越斗「そうか……お前えはリアフェルドウだ」

伯と雅人と安奈「なに！？」

越斗「さっき血を見てわかったぜ。明らかに普通のフェルドウとは違かった」

雅人「まじかよ……」

伯「……無いな」

越斗「お前、今まで生きてきて不思議な能力を使ったとか変な経験をしたことは無かったか？」

伯「……無いな」

越斗「そうか……完全に能力が失われたのは普通のフェルドウだけって聞いてた

んだがな……もしかしてとは思ったが……やはりリアフェルドウも能力を失ってるのか」

安奈「となると、実体がないNSSのことを調べるのはすごく難しいんじゃないかしら？」

雅人「でもまあ調べてみる価値はあるだろ。ちょっと休んだらさっきハッキングで調べた

NSSのところに行ってみようぜ」

越斗「ハッキング？そうか。だからお前等はあの電器屋に居たのか」

雅人「そうだ。ところがどっかの誰かが行く手を阻みやがってよお！」

越斗「・・・悪かった」

伯「まあおかげでNSSのことについて少しわかったんだしいだろ」

安奈「そうね。それにしても越斗。あなた強いわね」

越斗「俺は結構なナイトメアシティ経験者だからな。そこらの上級者には負けないぜ」

安奈「あれだけの剣術スキルをマスターしてる人は初めて見たわ」

雅人「安奈でも十分強えのにそれを上回るやつが現れるとはな・・・びっくりだぜ・・・」

4人は体を休め、NSS調査に備えた。そして数時間後、4人は地下から出てハッキング

で調べ上げたNSSの居場所へ向かった。そして目的地に到着したが、そこには何も

無かった。

雅人「よし!ついた・・・ってやっぱ何もねえな」

安奈「やっぱり実体が無いのね」

伯「ハッキングで印してあったのはこの辺か」

伯が印してあった方向に歩き出した。すると何かにぶつかった。

伯「痛!なんだ?」

次の瞬間ぶつかったところからいきなり高くて黒い塔が出現した。

4人「んな!?!」

安奈「まさかこれが・・・NSSの居場所?」

雅人「・・・だろうな」

越斗「で・・・でけえ・・・」

伯は塔の扉を開けようとした。そして扉のノブを触ろうとした次の瞬間、伯は不思議な

力により吹っ飛ばされた。

伯「のわっ!」

雅人「お、おい大丈夫か?」

伯「あ・・・ああ」

安奈「ただでは入れてくれなさそうね」

越斗「ん？何だ？この窪みは」

扉には大きな四つの窪みがあった。そのそばに大きな文字でこう印してあった

「扉を開けたくば、四つの魂玉を入手し、ここに収めよ」

雅人「四つの魂玉？」

越斗「こんなクエストを聞いたことがある。ナイトメアシティに存在する四体の

ボス敵。それぞれ違う場所に居るが、そいつ等を倒して、魂玉を手に入れてある

扉にはめて、扉の中のさらに強いボス敵を倒すっていうクエストだ。これはおそらく

そのクエストに似せたんじゃないか？」

伯「なるほどな。面倒だがやるしかないか」

安奈「そのようね」

4人は四体のボス敵を倒すことを決心した。4人は地下に戻りボス敵をどう倒すか

について話し合うことにした。

第三話フェルドゥとNSS

END

Nightmare City 第三話 (後書き)

よろしく

Nightmare City 第四話 (前書き)

よろしく

Nightmare City 第四話

Nightmare City

第四話 西の魂玉

伯達はNSSの元へたどり着くには4つの魂玉が必要であると知り、その魂玉

を所持する4体のボス敵をどう倒していくかについて話し合っていた。

雅人「ボス敵を倒すつつても、場所なんてわかんのかよ？」

越斗「ゲームの中で、東西南北の4つの方角に1体ずつ存在するって俺

は聞いたけどな」

伯「そうか」

安奈「そのボス敵、どのくらい強いのかしら？」

越斗「まあ俺ならなんとかなるレベルだとは思うけどよ、お前等じゃこてん

ぱんにされんだろうな」

雅人「んだとお!？」

越斗「事実だろうが」

雅人「試してみるか？」

越斗「へっ!上等だぜ」

伯「やれやれだな」

安奈「ちよ、二人とも止めなさい!」

越斗「ここの地下は広えしちょうどいいぜ。一対一じゃつまんねえ。おい!

てめえも来い!」

伯「お、俺もかよ!？」

雅人「へっ!なめられたもんだぜ!いくぞ!伯!」

伯「は、はあ!？」

越斗「さっさと構えやがれ！二人同時に掛かって来い！」

安奈「もうっ！なんなのよ！」

雅人「おりゃあああ！」

最初に雅人が攻撃した。雅人は勢いよく飛び上がり、空中から剣を振り

下ろした。が、あっさりと剣で防御されてしまった。

越斗「けっ！威勢がいくせにこんなもんか！」

すると伯が越斗の背後に回り込み攻撃した。

伯「くらえ！」

が、もう一つの剣で防御されてしまった。

越斗「背後から攻撃すりゃ効くと思ったか？甘いぜ！俺は双剣だ。この程度

の攻撃を防御できないと思ったら大間違いだぜ！」

越斗は二人の攻撃を受け止めながらその場でジャンプし、前後にいる二人の

腹を蹴った。二人は軽く5mは吹っ飛んだ。

伯と雅人「ぐおっ！」

越斗「けっ！弱すぎるぜ！こんなんでボス敵を倒せんのかよ？」

雅人「くっ・・・んだとお？」

越斗「てめえらは弱すぎる。鍛える必要があるそうだな」

雅人「くそ・・・馬鹿にしゃがってえ！」

伯「たしかに・・・越斗の言う通りだ・・・俺たちがこの状況を生き抜く

為には、もっと強くなくてはならない」

雅人「へっ！そうかもな！」

越斗「わかってるなら話がはいぜ」

伯「雅人！越斗は防御が硬い。だから二人で同じ方向から同時に攻撃して、

二人の力で防御を砕くぞ！」

雅人「力押しだがまあやってみる価値はありそうだな」

雅人は高く飛び上がり越斗を飛び越え、向かい側の伯のところで着地した。

伯「よし。いけるか？」

雅人「おう！」

越斗「二人の力を合わせるか・・・悪くない考えだが、この俺を力で碎ける

と思ったら大間違いだぜ」

二人は剣を構え、同時に走りだした。

伯と雅人「うおおおおお！」

すると二人の背中から青いオーラが出てきた。そして二人のオーラが混ざり

合い、オーラが大きな獅子の形に変わり、二人を取り込み、二人の姿が見え

なくなりそのまま越斗に突撃していった。

越斗「なにい！？」

安奈「これは！まさか！」

越斗は両方の剣でオーラの獅子を受け止めた。そして負けじと押し返した。

越斗「どおりやああ！」

オーラの獅子は越斗の押し返しと同時に消え、姿を現した二人が勢いよく

吹き飛ばされた。そして壁に叩きつけられた。

雅人「ぐあ！」

伯「ぐっ！」

越斗「まさかタッグスキルを使い出すとはな。正直驚いたぜ。こんなもん

いつ習得したんだ？」

雅人「さあな」

伯「いきなりこんな技を使っちゃった俺らのほうが驚いてる」

越斗「習得したのは、俺に攻撃をしたときってか」

安奈「私はそれを受け止めて押し返した越斗にも驚いてるわ・・・」
越斗「へっ！まあ悪くねえ攻撃だったぜ。だがまだ甘え。でも鍛えれば

ボス敵の1対や2対は楽に倒せるとは思うぜ」

安奈「ねえ！あのタッグスキルの名前、なんなの？」

越斗「俺が見る限りでは、初級タッグスキルの気獣撃にしか見えなかったぜ」

雅人「あれで初級かよ！」

伯「気獣撃・・・か」

安奈「ねえ・・・本題には移らないのかしら？」

伯と雅人と越斗「・・・あ」

4人は再びイスに座った。

雅人「それで、なんだっけ？」

伯「ボス敵が東西南北の4つの方角に1体ずつ存在するって話の途中だ」

安奈「そうだったわね」

越斗「強さで順位をつけると、1位が東、2位が南、3位が北、4位が西

だ。」

伯「弱いところから潰していったほうがよくないか？」

安奈「そうね。ということは先に行くべくは西の方角ってことかしら」

雅人「そうだな」

越斗「俺はどこからでも構わねえ」

安奈「じゃあ西からで決定ね」

伯「じゃあ準備が出来次第出発するか」

雅人「だな」

4人は数時間地下で待機した後、地下を後にし、西の方角へ歩き出した。

そして途中で食料などを調達しながら、何日もかけ西へ歩き続けた。

そして到着したのがナイトメアシティの西の先端にある大きな井戸だ。

4人「……………」

伯「…………越斗…………本当にここで間違いないのか？」

越斗「あ、ああ……………」

雅人「本当だろうな？」

越斗「ま、間違いねえって…………たぶん……………」

安奈「たぶんって……………」

伯「なんか不安になってきたな……………」

伯と雅人と安奈は越斗をガン見した。

越斗「…………わかったわかった。先に入りゃあいいんだろ？」

越斗は思い切って井戸の中に飛び降りた。三人は井戸の中を覗き込んだ。

伯「……………なんも聞こえないな」

雅人「死んだか？」

すると井戸の中の越斗が喋った。

越斗「降りてきやがれ。ここで間違いねえ」

3人は疑いながらも井戸の中へ飛び降りた。すると真っ暗なはずの井戸の

中がなぜか明るかった。

越斗「ほらな？俺の言った通りだ」

安奈「こんなところに扉があるわ」

安奈は扉を開けた。するとずっと下に続く階段が目の前に現れた。

伯「長い階段だな」

安奈「下りましょう」

4人は階段を下っていった。そして長い階段の終わりに大きな扉があった。

越斗「この先は要注意だぜ」

雅人「なんでだ？」

越斗「このゲームは大きな扉があるとたいがい若干強え敵だとか中

ボスを意味する」

安奈「行きましょう」

扉を開けた。そこには広い空間が広がっていたそしてその空間の先にさらに大きい扉があった。

越斗「あの扉がおそらくボスだろうな」

越斗がそう言った次の瞬間、天井からアンデット形の敵が数え切れないほど降りてきた。

雅人「うひゃゝ・・・きも・・・」

安奈「同感ね」

伯「どうする？」

越斗「決まってるんだろ。片っ端からぶちのめす！」

安奈「分散して倒すわよ！」

伯「ああ」

雅人「りょうかい」

4人は分散した。越斗が双剣は顔の前で十字に構え始めた。その様子が若干

伯の目に入った。

伯「ん？」

越斗「はあああああああ！」

伯「まさか！・・・みんな離れろ！」

伯の声を聞いた安奈と雅人は即座に越斗から離れた。

越斗「火炎円衝陣！」

越斗は双剣を勢いよく地面に突き刺した。その瞬間越斗の周りの広範囲が地面

から激しく炎上した。これにより敵の8割が死滅した。

雅人「相変わらず大迫力だぜ・・・」

その後4人は敵を全滅させた。

越斗「雑魚過ぎるぜ！」

雅人「ちよろかったな」

安奈「油断は禁物よ。この後が本番だわ」

伯「この扉の先に魂玉を持つボスが居るんだな？」

越斗「恐らくな」

伯は扉を開けた。4人は中へ入っていった。すると勝手に扉が閉まった。

伯「んな!？」

雅人「おなじみのパターンだな」

安奈「開かないわね」

その時、今まで聞いた事の無いどす黒い声が部屋のなかに響き渡った。

???「我が大いなる力の源である魂玉を狙う愚かな連中よ、ここ
で滅びる
がいい!」

第四話 西の魂玉 END

Nightmare City 第四話（後書き）

よろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0797u/>

Nightmare City

2011年10月9日06時11分発行